

かね まつ ひろし
兼松 熙**不撓不屈の人**
— 岐阜の電源開発に力を注ぐ —兼松 熙 (1860 ~ 1952)
出典：『中京名鑑』1936**■生い立ちから電気事業まで**

兼松熙は、1860年、美濃国加茂郡（現・岐阜県加茂郡坂祝町）に生まれた。

1879年、坂祝村の戸長（村長）となり、その後は、郡役所、県の官員として活躍し、当時の県知事から、その力量を見込まれて、内務省に転職した。

1899年佐賀県下の一郡長として兼松は着任した。当時、乱麻と云われるほどに混乱した郡政改革を断行した、議会の全反対を退け、法律的正しい点を強調して、強い意志を持って旧弊な地方行政を立て直した。この時すでに、兼松は後の政治的手腕の片鱗を發揮していた。

兼松は、郡長を退任後は、衆議院に2期当選した。政界に在った2年弱と短期間であったが、後年実業界での活躍の素地を作ったと云える。その後は、実業界へ進出した。当時の名古屋財界の一大勢力を誇っていた「奥田正香」に取り入り、「奥田正香の四天王」とも言われた。

木曾川水系の電力水系の利権を得て、八百津発電所を建設し、「名古屋電力株式会社」を設立するに至る。後に、名古屋電燈が、名古屋電力を合併すると、兼松は取締役となった。同社への入社後は、福沢桃介氏と深く結び、地方電気

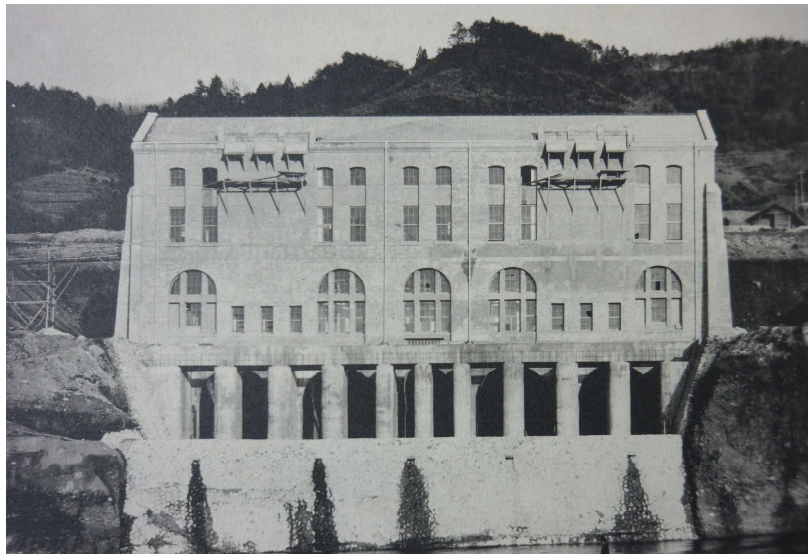
業の興隆にその知恵を絞り、中部日本の電業界を導いたと云える。

中部に於ける電気業界の一角に確固たる地位を占めていた、奥田正香が、遊郭移転問題で没落時にも、福沢桃介の尽力で、不死鳥のごとく復活し、兼松は名古屋電灯の監査役に返り咲いた。岐阜県内の水資源を活用した電力開発（濃飛電気、大白川電力）に力を注いだ。濃飛電気と大白川電力の社長に納まると、晩節を全うするために、株主に迷惑をかけないようにと、一人で多くの事業に関わり合いを持つのではなく、一人一業主義を奉じた。

■衰えぬ事業に対する熱意

1929年、兼松は68歳にして、危急の状態にあった豊田式織機株式会社（現・豊和工業）の社長に迎えられた。不振を極めていた織機からの脱却を目指して、社内に研究部を設置し、業務の刷新を図った。この時点で、キノコ号の生産も行われた。また、混迷を深めていた豊田自動織機との交渉にも臨んでいた。高齢にもかかわらず毎日入社し、事業の陣頭に立った。結果として、豊田式織機は、復活を遂げ、中興の祖と言われた。

1932年、豊田式織機は、軍需品の生産を始め、大陸への進出を目論んでいた。1940年4月、兼松は豊田式織機・昭和重工業社長とともに辞任し第一線からは引退した。



八百津発電所完成前の写真 出典：『木曾川第一水路工事寫真帳』明治42年

■戦前期の中部日本の電業界の基礎を形作った一人

兼松は、木曾川の水利権を得ると、地元の財界を巻き込む形で、名古屋電力を設立し、八百津発電所の建設に邁進した。戦前期の中部電力の原型である東邦、中京地域の多くの発電事業に連なる者は、大きな関わり合いを持っていた。中京地区（当時の名古屋総称）における地方電気業の興隆にその持てる能力をつぎ込んだ。戦前期の中部日本の電業界の基礎を形作った一人と言える。

また、福沢桃介の体調不良により、頓挫したが、民間主導で、群雄割拠ともいえるような状況であった、中京圏の電力会社を一つに纏め上げようと努力もした。また、長良川の水運を運河のように、使用することさえ夢に描いた。1928年年「木曾川運河計畫調査報告書」を現わして、海外の運河利用状況も含めて、木曾川の運河としての利用促進を画策もした。